川島病院小規模多機能施設が起工

工期中の無事故を祈願

仮称・川島病院小規模多機能施設新築起工式が3月31日、鹿児島市内の建設予定地で行われ、施設関係者、施工業者等が出席して安全施工と工期中の無事完成を祈願した。

起工式では、祝詞奏上などに続き、刈り初めの儀を川島裕雄医療法人愛人会理事長、穿初めの儀を濵田稔㈱大匠設計社長、杭打ちの儀を渋谷栄城松尾建設㈱鹿児島支店長が行った後、それぞれ玉ぐしを捧げて工期中の無事故を祈願した。

同施設は、グループホーム及び共同住宅付デイサービス。施主は、㈲愛(川島晴美社長)。住所は、鹿児島市谷山中央1丁目4088－14、15、16、18及び4089－5、6。計画によると、敷地面積370・97平方㍍にS造5階建1244・33平方㍍の施設を新築する。1階は駐車場、2階はデイサービス、3、4階がグループホーム（2ユニット・18床）、5階が共同住宅となるもよう。工期は4月1日～9月30日の予定。なお、設計は大匠設計、施工は松尾建設が担当。

杭打ちの儀を行う渋谷鹿児島支店長
＝鹿児島市の現地で

献血に協力する会員ら
＝鹿児島市の日本赤十字血液センターで

鹿児島市管工事協同組合

350人が善意の献血

社会奉仕活動の一環として、今年も鹿児島市管工事協同組合（肥後勝司理事長）が1日、日本赤十字血液センター（鹿児島市鴨池新町）で恒例の集団献血（15回目）を実施した。

この日は、午前9時から受け付けを開始。血液検査や血圧測定などを行った後、次々と献血車に乗り込んでは採血していた。今回も健康診断と併せて実施したことから、午後4時半の終了時まで約350人が献血に協力。ほとんどの献血者が400ミリリットルに協力するなど献血への理解を示していた。

同センターによると「例年、冬場（2～3月）と夏場（7～9月）に血液が不足しているが、近年は県民の献血への理解が深まり、多くの人に協力をいただいている。血液不足となるこの時期の団体の献血は本当にありがたい」と善意の献血に感謝していた。

鹿児島での勤務を終えて

前九州地方整備局鹿児島国道事務所副所長　赤星　文生

平成15年夏から17年春までの2年足らずを第二のふるさと「かごしま」で恩返しできたかな？

二度目の勤め、さらに多くの方々から元気と感動を頂いた感がする。この間、道づくりに経済効率優先から選択と集中による成果主義へと大きな変革があった。

絶対量の不足した時代では、誰しも確実に目的地に行ける道そのものストックを求めていた。しかし、その仕組みは、ややもすると機械的になり地域固有の文化・風土を忘れ去り、しかも充足感と経済活動の変貌と相まって再考の時期に入ってきた。

言うまでもなく、道路にはネットワーク構築と空間づくりの二面性がある。前者は西回り道に代表される県土の骨格を形成し、後者は生活の舞台としての人・モノ・情報を導き

感性を育てる道

町並みを造る。これらをあえて私は道を活かして育てる「アイウエオ」と称したい。

(ア) 安全・安心のみち→バリアフリー（照国通り）

(イ) 憩い、癒し、生きェイ）

(ウ) 潤いのある美しいみちづくり→景観（シーニックバイウ

(エ) 円滑でエネルギー損失のないみち→渋滞対策（東西道路）

(オ) 面白くて味わいのあるみち→天文館社会実験（オープンカフェ）

これらすべてを当地鹿児島で経験できたことを幸せに思う。

そして、5年で見える道づくりをめざす「ちゃくちゃくプロジェクト」。市民の命と財産をつなぐ道づくりにおいて、毎年の整備目標や完成時期を公表したのは全国に先駆けてのことであった。変化（チェンジ）に柔軟に対応し、改善に向けた挑戦（チャレンジ）と創造的（クリェイティブ）な発案が求められる（3C）。

ただし、単に合理的・効率的のみで進めるばかりでは市民の合意は難しい。たとえば、幅広い世代が一緒に集い語らったあのオープンカフェの感動や次世代に伝えるボランティアサポートによる道守体験。これらを通じて今思うのは、道は感性をはぐくむ舞台であること、そしてどんな道をどこに造るのかは、どんなまちづくりにしたいかにつながるということだった。

南の国でもらった英知と感動を翔ぶが如く新幹線になぞらえ、「風は南から」北の国へと伝えたいと思う。

4月1日付けの人事異動で、九州地方整備局北九州国道事務所副所長へ転任する赤星文生氏に鹿児島での想い出等を語ってもらった。

4日に新装オープン

鹿児島SRが新栄町へ移転

松下電工

松下電工㈱（大阪府）は4日から、鹿児島市の鹿児島ショールームを移転し新装オープンする。当日は午前11時からオープンセレモニーを実施し、午後1時から開店する。

新ショールームは、エンドユーザーへのトータルコーディネイトがコンセプト。松下電工㈱と松下電器産業㈱のコラボレーションにより、住宅関連商品から家電商品まで充実した商品ラインナップを展開する。

システムバスルームでは、酸素効果で保湿効果を高める「酸素ぽっかぽか美泡湯」、暖房換気乾燥機とナノイーイオン効果によりカビや臭いを未然防止する「ナノイー・」を採用したユニバーサルデザインのシステムキッチン「ウェーブアイ」を展示。また、「IH調理器」やお掃除手間要らずの「壁掛けエアコン」、新製品の吸湿消臭シート「湿気ネーゼ」をそろえるなど、最新の住空間スタイルを提案するショールームとなっている。

移転オープンする鹿児島ショールームの住所等は、鹿児島市新栄町8－2（☎099・255・5335 FAX255・5352）。

連携・新分野進出モデル活動

取組みを全国に発信

建設業振興基金

建設業振興基金は、企業連携・新分野進出モデル構築支援事業の「報告会・講演会」を開いた。鈴木政徳理事長は「全国で再生に取り組む建設企業の参考になることを期待したい」と挨拶。17年度も同様の事業を行い、「各地域のさまざまな取り組みを全国に発信し、建設業の再生の動きがさらに活発化するよう基金としても取り組んでいく」と話した。その後、モデルとなった42事業者の担当者がこれまでの取り組みなどをそれぞれ説明

報告会では、静岡県の市川土木、神奈川県の横浜市保全研究会、岐阜県の間伐材利用拡大研究会など計42事業が、1年間のモデル事業の取り組み成果を発表した。

このほか、モデルとなった42事業者に対して行ったアンケート調査の結果について、基金の担当者が紹介。結果によると、今後の経営方針については、「建設業を中心に関連分野に展開」とする回答が83・3％で最も多く、「建設業から撤退（転業）」は4・8％にとどまった。

モデル事業については、8割以上の事業者が「半年以内」か「1年以内」に次のステップに移行できると回答。今後も事業を継続するためには、「経営者の熱意」（78・6％）、「外部機関・専門家との連携」（59・5％）、「社員の意識改革」（42・9％）、「資金」（38・1％）が必要と答えている。

千葉市複合施設

初の日本PFI賞に

日本PFI協会

日本PFI協会（西藤冲会長）は、3月23日に日本PFI大賞選定委員会（黒川紀章委員長）を開き、「千葉市消費生活センター・計量検査所複合施設PFI特定事業」を総合的な観点から評価し、初の日本PFI賞に決めた。同事業は、「維持管理・運営」「モニタリング」の二つの部門賞も受賞した。表彰式は、6月30日にセミナーの開催に合わせて行う。

日本PFI大賞は、発注者や受注者などを表彰し、PFI事業を正しい方向に導くことを目的として設けた。

選定の結果、大賞のほか、九つの部門賞（受賞対象は7事業）を決めるとともに、特別賞に10事業を選んだ。特別賞のうち、地元建設業などが主体となって進める事業を対象とした「地域完結型PFI賞」には「仙台市（仮称）松森工場関連市民利用施設整備事業」など5事業が入った。

選定結果や詳しい講評は4月発行予定の『PFI年鑑2005』に掲載する予定。